

# 日本における「支那」「満蒙」民族調査研究

—民族性格をめぐる—

小谷野 邦 子

## 1. はじめに

近代日本の領土拡張主義のもと、「満蒙は日本の生命線」と目した時代、満洲を中心とした中国人について、日本の民族心理学研究は何をしてきて、社会的にそれらはどういう意味をもっていたのかを捉えることを目的として、いくつかの探索を試みてきた。先の研究<sup>1)</sup>では、そういった時代の要請のもと、欧米に発した民族心理学が日本にどのように導入・評価されたのか整理し、植民と民族心理学を結びつけようとした、ある政治家の捉え方およびそこに期待したものを紹介した。そして、そういった流れにそって研究を検討する枠組みを提示するとともに、1920年代の具体的調査研究のいくつかの考察を試みた。ここでは、それ以後の心理学業績の検討をすすめたい。

1931年9月18日「満洲事変」以後、日本はあからさまに中国に侵略を始め、1941年12月8日真珠湾攻撃で開始する太平洋戦争に突入、1945年8月15日の敗戦まで15年の長きにわたって無謀な戦争を遂行した。その時代を反映して、1930年代に日本の心理学は、最も活発に民族心理学の研究を展開した。そういった研究には、大別して3つのジャンルが確認できる。一つは国民性格とか民族性格とかいわれるものを理論的・研究方法論的に整理し、それに沿って、主に欧米で発表された諸研究の紹介をしたものである。これらのなかには純粹に理論的・方法論的研究、また日本人の特性を明らかにしようとして行われた研究、さらにその優秀性を証明しようとする意図にはじまっているものなどがふくまれている。二つには、とりわけ中国・「満州」人を対象として、その性格特徴をつかもうとしたものである。そのなかには外国人の作品の翻訳や心理学者の労作に限らず、さらにそれらを独自に整理して、中国人性を追求しようとしているものがある。三つ目に、同じ線のテーマで実際に対象者にあたって調査研究を試みたものである。このなかには、知能検査、性格研究が含まれ、他国（人）についての見解・意見をきいた調査などもある。

第一のジャンルには、桑田芳藏<sup>2)</sup>、楠弘閔<sup>3)</sup>、久保良英<sup>4)</sup>、安倍淳吉<sup>5)</sup>、戸川行男<sup>6)</sup>など、興味深いものがあるが、ここで対象とする「支那」「満蒙」の民族性研究に直接は関連しているとはいえないものなので、その関係づけは別の機会に譲ることにする。第二と第三のジャンルとした「支那」「満蒙」の民族性格についての諸研究の検討を主眼としている。

さらに、当論文では1930年代以降の主として文献的研究に焦点をあてる。1930年代の研究というと、田中寛一の行った「東洋諸民族ノ智能ニ關スル比較研究」<sup>7)</sup>を、その規模においてもまず挙げられるであろう。それをも含めて、知能に関する研究や他の調査研究も次を期したい。

## I 日本人以外の著作

### 2. 中国人のみた中国人性—林語堂著『我國土・我國民』<sup>8)</sup>

当時の中国人自身による自国国民性に関する研究・著作といえ、日本の心理学者にたいする影響という点からみて、林語堂のものをとりあげなければならないだろう。それは、翻訳出版されて、ベストセラーになったというだけでなく、IIで取り上げる大谷孝太郎、渡辺徹、天野利武の研究でも対象のひとつとして検討されている。注目される内容をもっていたということだろう。

原著は“My Country and My People”という書名で、ニューヨークのジョン・デイ社から1935年に出版された。アメリカでベストセラーになり、その後各国で翻訳された。パール・バックが序文を寄せて、「支那についてかゝれたものゝなかで、最も眞實に徹し、深奥でもあれば、完璧でもある最も重要な本である」と最大の賛辞を贈っている。

日本では新居格によって訳されて『我國土・我國民』として1938（昭和13）年に刊行された。笠間果雄は「この書は実相支那を語って現代に二大貢献をしてゐる。一つは期せずして現代支那を相手とする我日本の行動の辨明をする結果になったこと、もう一つは歐米特にアメリカの文化と思想と生活とに對して、東洋人の感ずる正直な批判を間接に與へてゐること、この二つである。一年少して十版を突破した位、汎く讀まれたのは、誠に故あるかなと思ふ」<sup>9)</sup>という手放しの解説がされるほど、当時の日本にとって都合よく受け入れられたのであった。

林語堂は主として外国で教育を受けたので、比較的中国に対して客観的な観察を下すことができ、しかも本来中国人であるから、外国人の陥りやすいその文化理解の浅さからくる皮相な見解から遁れやすい、と評価された。しかし、中国人には好感をもって迎えられず、英文の原著が世界的に読まれたのに対して、本国中国では当時翻訳書が刊行されていなかったという<sup>10)</sup>。あまりに赤裸々に描写したためかという憶測もあるが、少なくとも、中国人にとって納得しにくいものであったようである。

本書は第一部の基礎論、第二部生活論および結論から成っている。第一部は、第1章支那國民、第2章支那人の性格、第3章支那人の心、第4章生活の理想から成り、第二部は、第5章婦人の生活、第6章社会生活的及政治的生活、第7章文学生活、第8章美術生活、第9章生活様式に分かれている。

本書は、IIの日本人による文献研究などでもとりあげられており、ここでは、第2章の「支那人の性格」の部分を中心にやや詳しく触れておくことにする。

彼は支那人の性格として、8個の特質を挙げている。彼自身の言葉で語らせてみよう。

- ① 人格の円熟—「支那人は通例大家族を支え、従兄弟などのために地位の保障もしてやらなければならないので、教職にある身なら学校教師に止まっていることが出来ず、何とか榮達の手段方法を講じなければならなくなる」「榮達せんとするその過程が、彼に忘れることの出来ない生活と人間性との教訓を與へる」のである。
- ② 忍耐—彼は支那人の最も悪いそして最も著しい特徴として、忍耐、無関心、老獪を挙げる。何故忍耐が悪であるかという、「支那人は西欧人が忍ぶ以上に、暴虐不秩序、批

政を忍んできた。そしてそれらのものを自然法則の一部としてさへ考へてゐるやうな所がある」という。それは特に、「支那社会の縮図である家族制度の結果である」としている。

- ㉔ 無関心—「個人の権利に法律の保護が加へられてゐない社会では、無関心であることが常に安全である」「或ものはそれを生得の分別で知り、また他のものは一二度手を毀いて悟るのである」
- ㉕ 老獪—これは支那人の特徴の中で最も著しい、最も深奥のものであって、西洋人には説明し難いと彼はいう。彼はこんな例で説明している。「青年が年寄った祖父を九月の朝、炉端から引張り出して海水浴に連れて行かうとする。そしてその目算に外づれると彼は不機嫌になるが、老人の方では何んともなく愉しそうな微笑を浮べる。この微笑が老獪の微笑である」と。
- ㉖ 平和主義—「支那人はこの平凡な世の中にひどく興味を感じ、撓まぬ忍耐力、疲れを知らぬ勤勉、義務の観念、分別する常識、快活、ユーモア、寛容等をもつてゐる。そして我々が満足と呼ぶところの幸福を辛苦な環境のうちに見出すのに比類ない才能をもつてゐる。さうした諸々の性質が、平凡な生活を面白いものにするのである。その中の重なるものが、平和主義と寛容である。」
- ㉗ 知足—「陝西省の如き飢饉に打ちひしがれた地方に於いてでさへ、余程その程度が甚しくなければ足るを知る精神は概して行はれ、農民によると尚且微笑み得るのである。」
- ㉘ 諧謔—「諧謔の花は、國民の知性が發達して、自己の理想をこき下ろしうるやうになった時に咲き出るものである。それは辛辣な自己批判の知性に外ならない。」
- ㉙ 保守主義—「最も重要なことは支那人は変化を欲しないことだ。習慣、婦人服、交通機関の性質の外的変化の背後には、洋服を着、英語を巧に操る性急な青年を嘲笑するのをわすれないものがある。」

林語堂の鋭い分析を紹介するには紙幅が足りないが、機知に富んだ表現は上記の引用に  
もうかがわれよう。

満洲に関する文明批評家である加納三郎<sup>11)</sup>は、この林語堂の著作を評価しつつ、批判は、「支那民族が歴史的に一動いてゐるものとして一把握されてゐない」という点に集中する。それは、「われわれが激しい欲望を以て知ることを希つてゐるのは、漢口に沸つてゐる抗日支那の人間の本質なのである。はるかな雲咽のうちにある愛すべく、憎むべく尊むべき舊い支那民族ではなく、日本民族の前面に立ちはだかり、闘争にせよ提携にせよ、生死の宿命的關聯を持たざるを得ない今日の支那民族なのである。われわれは、支那民族を、謂はゞ觀照的にでなく、実践的に把握したいのである」という。この言にまさにこの時代の民族心理研究に対する要求が凝縮しているであろう。そして、もう一つの加納の批評に学ぶものがある。「彼が、支那の民族性としてあげた八つの特徴が、不思議にも我國の農民の性格に通ずるものゝあるのを氣づかないだらうか。支那の民族性が日本の農民の性格と血脈を通してゐるといふことは何を意味するのだらうか。二つのものが同質の地盤の上に立つてゐることを意味するのだ」として、「彼はこの点民族性の中の普遍的なものを見ることを忘れてゐるやうである」と指摘している。8つの特徴が日本農民に通じるものがあるかどうかはともかくとして、この批判は、心理学を含む多くの当時の民族性研究にあては

まるものがある。「支那」人を研究することは日本人との比較が必ず含まれており、しかもそれは違いがあることを前提としている。往々にしてその違いとは優劣を前提にしたもの、あるいはそれに収斂するものなのである。そういった“違い”を明らかにすることが民族性研究の目的となっている。しかし、本来民族性研究には同質性を明らかにしていくことも含まれているはずである。林にかぎらず、この点の完全に欠落した研究が、当時の研究であった。

ついでに述べると、1939（昭和14）年、増訂版が出され、そこには日本の中国侵略を糾弾する内容の第10章が加えられた。また同じ頃、日本の残虐ぶりを描いた“Momennt in Peking”が出版されると、林語堂は、日本攻撃をする欧米にも影響力をもつ危険人物とみなされていく。さらに、1943年以降に林が米英両国政府の重慶政権に対する態度を批判する発言が目立ってくると、日本側メディアの林の扱いは微妙に変化していく<sup>12)</sup>。しかし、我が国における心理学的「支那」民族性論の展開のうえでは、このような風潮はあまり影を落とすことなく、原著の訳本にとりあげられて特性のみが扱われている。

### 3. ドイツ心理学者の観た「支那」民族性

中国に在住した欧米人が、その見聞きしたことから中国人の国民性について論じた著作は少なくない。布教活動のために来中した人のものなどがみられる。その代表的人物、宣教師として22年間山東省に在中した米国人アーサー・スミス（Arthur H. Smith）は、“Chinese Characteristics”を著した。これは彼の農村生活に関するもうひとつの著書とともに、当時「支那」研究に関する最良の図書のなかに数えられてもいる。上記の書のなかで、彼は「支那」人の性格を観察して、26の特徴を列挙している。しかし、的外れの場合が少なくないと評され、風俗習慣の根底から異なっている中国人についての論評は、「支那」通といわれる欧米人にとってさえ、いかに難しいものであるかが窺われるものとなっている。

ここでは、日本とも関係が深く、心理学者でもあるヴィクトール・フレーン（Frene, Victor）<sup>13)</sup>の『支那民族性の研究』<sup>14)</sup>をとりあげることにする。これは、アジアにおける諸民族及び民族政策についての研究を目的とする井上民族政策研究所によって、その研究資料第1輯として世に出されたものである。

東洋に強く惹かれ、25年間中国で起居して、その政治・教育・文化に関与し、二度の来日で多くの日本人とも知友を得、本書で両国の和平・提携を企図して、外国人に「支那」の風景・風習・文化・歴史などを紹介をしつつ、その分析を展開している。したがって、本書には、広く教育や政治などに関する描写・主張も多いが、ここでは、フレーンの心理学的素養が反映されている、彼の「支那」民族性についての見解を彼の言葉で紹介していくことにする。

彼は、「支那」人の日々の生活及び労働感情の力源を『没法子』によって、また、その道德理念・道德感情を『面子』によって説明する。それを、農民の、都市住民の、さらに官吏・知識人をもその心理の底を貫いている原理としてとりあげる。

「支那」の、特に「北支」の年間の寒暖の差の激しい気候が、「北支」人の活動の鈍重さ

をもたらしているとしている。むしろこのような気候と環境の下に、何千年という永い生活に堪えてきたその強靱な生活力は驚嘆すべきものがあるとしながらも、彼等は自然の奴隷である境遇に全く順応してしまっている、という。彼等がよく言う、「没办法」（仕方がない）は、これは自然の脅威より脱する方法を持たないからであるとも述べている。

しかし、「この『没办法』は宿命論とは何等関係がない。それは宿命論的なものではなく、又怠惰を表はすものでもなく、既に説明した通り頑固さの表現では尚更ない。それは一種の寂滅主義的英雄主義であり、『關はずにおいて呉れ！ 邪魔して貰いたくない。私は超然としてゐるのだ！』といふ意味である」（p.47）。日本との関係でいえば、「私はすべてに超越している」という「没办法」の意味は、日本に対しては「私は日本より優れてゐる」という意味になると示唆している。「支那がかゝる日本に對する優越觀念を心中に持つてゐるのに、如何にして支那を日本の心からの共働者となすことが出来ようか？」（p.78）と、日本人に問いかける。

また、「多分、支那人を自然から最も創造的に潑刺と解放する進化の鎖の一端には藝術があるが、そのもう一つの他端には純粹な自然への服従が—それは不可避免的に受動的であるが—ある」（p.53）

だから、「『没办法』といふ支那精神を撲滅するには、支那の文化全部を變化せしめねばならない。そして驚くべき精神力の吐け口を他に見付けてやらねばならない」（p.48）

「支那にとって、自己の弱点を自覚することは『面子』を失うことを意味する。そしてこの『面子』とは支那の生活においては『現実』ということと同じことであり、『面子』を失うことは支那の知識階級及び指導者にとっては、一切を失うにも相当するのである。もし日本が支那をよく理解し面子を尊重すれば、日本は干戈に訴ふことなくして、その欲するところの政治的經濟的再調整を行ふことが出来たのであった。然し今の處、支那膺懲の軍を進めてその面子を蹂躪してゐるので、日支兩國間に政治的經濟的調整を行ふことは極めて困難になつてゐる」（p.39）と指摘する。

「『面子』こそは支那人の本質ともいふべきものであり、又非現實的支那人の現實といふべきものである」（p.40）

「支那に於ける日本の發展は、もし日本の責任ある者が支那の『没办法』『面子』『鈍重』等を、嘲笑すべき特性と考へたり又は支那が止め度なく頹廢して行くのを示す徴候であるとか考へたりするうちは、苛立たしい程遅々たるものがある」（pp.48—49）という。日本側の「支那」人理解についての浅薄さにたいする鋭い警告である。

単なる警告だけでなく、その因って起こる食い違いについても耳を傾けるべき示唆がなされている。「現在迄のところ、日本は支那の知識階級の人心を得るに成功してゐないことは疑ひない事實である。それは日本が彼等と接觸することを欲しないが爲めではなく、支那の精神的自發性と日本の自然主義的自發性との間には非常に深い溝があるからである。現在のところでは、日本と支那の交渉がしっくりいつてゐないのは、この兩國の自發性の摩擦によるのである」（p.75）という見解を展開しているのである。

彼の指摘は一顧に値するものを多く含んでいるが、このような「支那」人にたいする日本人の態度の、依つて来る原因について、歴史心理的分析がなされていないところに、そして両国間の現社会状勢（戦局）についての無視が、心理学者フレーンの限界であるかと

思われる。

## Ⅱ 中国についての文献を中心とした研究

### 4. 大谷孝太郎『現代支那人精神構造の研究』<sup>15)</sup>

近代の日中の教育関係について考えるとき、東亜同文書院の存在は看過できない。日中間の貿易や商取引の推進を目的に、中国貿易担当者養成のために「日清貿易研究所」を1890（明治23）年に上海に設立したことに発している。その後1901（明治34）年ビジネススクールとして上海に「東亜同文書院」が開設される。時代の波に翻弄されながらも、中国人学生も含め、中国各方面に人材を生み出したといわれる。同校の特徴は日本人学生にたいする徹底した中国語教育と、中国研究、特にその中国各方面への調査旅行であった。それらの報告書やその旅行体験をベースに組織的な研究がなされた。

そのような成果のひとつに1935（昭和10）年大谷孝太郎が著した『現代支那人精神構造の研究』がある。大谷は1923（大正12）年に上海に赴いた、東亜同文書院の社会科学および精神科学の教授であった。

「哲学的人間学」の立場にたって、まず、一定の国民性概念、国民性と個人性格の両者の対立および連関の理念、国民性把握の方法を確立して、それに基づいて、既成の個別的「支那」の歴史や文化の底流を探りながら、残されているいわゆる「支那」国民性についての緒論をたどり、「吾々の支那人との生活体験を掘り下げ」という方法であった。

構成は大きく三編に分けられている。

第一編は「支那人精神構造と支那国民性」で序論というべきもので、ディルタイとシュプランガーの精神構造観を紹介した後、「支那人精神構造の學」とその「類型」について論じている。歴史や文化の理解とあわせて、たとえばマックス・シェーラーの集団心などの概念から、国民性と庶民の精神構造、民族の時代性などを検討している。その第3章の2節で心理学の精神構造類型論からみた「支那」人の類型を論じ、その歴史性、個人的発達、文化発達段階等から国民全体の類型的構造について検討している。第4章、第5章をとおして、普遍的文化科学的概念、庶民生活の歴史文化や、先行研究を駆使して、基底部分としての「支那」人精神構造の永遠の類型と現代の「支那」人の上部構造としての類型について論じている。

第二編は「現代支那人性格観照の先縦」で本書の骨子部分である。その第2章「外國人の現代支那人性格観照」はリヒトホーフエン、メドハースト、ウィリアムス、ジョンソン、スミス、ロードらの欧米人の観た「支那」人の性格について、さらにマックス・ウェーバーと関係させて津田左右吉、さらに和辻哲郎等日本人の「支那」国民性に関する所論を、時代、自然環境、経済等といった観点から紹介、論じている。第3章は「内省たる現代支那人性格観照」で、梁啓超から王桐齡、傅紹曾、王造時、そして林語堂にいたるまでの中国人による主な「支那」人観に触れている。

第三編は「現代支那人の精神構造」で著者の見解が述べられている。大谷はそれを「形式的現代支那人精神構造」と「内容的現代支那人精神構造」とに分けて考え、その上で「現代支那人精神構造の変革」を説いている。形式的には「支那」人の精神は一見矛盾していて、構造がないかのように捉えにくい、そうではないことを、幾多の対立的表現形

をとりあげてその合理性を論じようとしている。また内容的には精神作用の方向の支配と従属の関係を解きあかそうとして、群的保身をキー概念としてその構造と理論をもって、美的方向、宗教的方向、政治的方向をとりあげて説明を試みる。最後に現代「支那」人の精神構造が近代欧米文化に接触して、それを受容し、社会のおよび政治的方向が変革されて、「支那」国民価値合理主義自体の止揚がはかられる方向が探られている。そこで「自然的群的保身」より「國民的保身」に向かって変革する将来に、近代欧州文化諸国民特に日本国民との接触およびその文化特に日本文化の受容いかながかかっていると主張している。まとめにいかにもこの時代の日本中心の見解が顔をのぞかせている。しかし、中国人性を論じている「群的保身」の項などは日本人の解明にも通じるものがある。

大谷の878ページにおよぶ大部な本書は、「邦人の支那國民性の研究としては最大の勞作で最も完全なもの」<sup>16)</sup>とさえ評されている。心理学に特化してはいないが、とくに第二編の「支那人觀」は、この種の研究をすすめるにあたって多くの所論を大観するのに便利な情報を提供していて、この後の「支那」人性を問題にする際に多くの研究で参考にされた。次ぎにとりあげる渡邊徹の研究にも、その具体的内容というより、方法の枠組みに何らかの影響をもったと考えられる。

## 5. 渡邊徹による二つの文献研究

渡邊徹<sup>17)</sup>は2つの研究、「日支兩民族の性格の比較」と「支那民族性格の自觀と他觀」を発表している。前者は日本人と中国人の性格の比較を、先行研究を広くあたって、それを整理し比較検討したものである。後者は中国人の性格に焦点をあてて、中国人の觀た中国人、外国人の觀た中国人について比較検討しているものである。

<1>「日・支兩民族性格の比較検討における二、三の資料について」(上、下)<sup>18)</sup>

### (1) 民族・国民・種族および民族性格の概念と対象とした資料

カント「実用的見地に立つ人間学」(1798)中の民族・国民・種族などの概念に基づいて、民族、国民等の定義を開始している。国民は国家の民族、国家の臣民—国家に所属した民族とか、また国民精神によって統一されている民族とかを国民と理解するとしている。そのうえで、支那国民はいわゆる5族(漢民族、満洲族、蒙古族、西藏族、突厥族)のすべてを、日本国民はいわゆる大和民族、朝鮮族、台湾土人、アイヌ人、樺太のオロチョン族、ギリヤク族などを含むという理解を述べているが、ここでは結局、支那民族として主として漢民族を指すものと理解し、日本民族といえば、いわゆる大和民族のそれぞれの性格の比較検討ということに解してよかろうとしている。

上記のような理解を提示しながら、実際にはある意味乱暴に対象民族の範疇を規定し、さらにその具体的検討資料は、満州事変に関係して現れた身近な新聞や雑誌およびほぼ同性質の単行本の記事から両民族の性格を抜き出すことから始めるのである。

「実際の日常生活において、人間同志が交際し合う間に、相互に感ずる性格の見方や民族がその歴史を構成して行く間に現れてくるところのものを、(以下に挙げるような標徴から)眺めて見ることがかへって両方の民族性格を実際的に把握することが出来るのではないかと考えた」と彼は、資料対象とした理由を説明している。

比較に用いられた二、三の資料とは、

- (a) 信濃憂人訳（多分ペンネーム）『支那人の見た日本人』昭和12年12月1日（三版）  
青年書房

これは、汪兆銘、郭沫若など26人の中国人が、日本人と接触して見聞きしたことをもとに日本人についての感想とか、観察にもとづく印象記のようなものを集めたものである。研究したものというのではなく、日本人にみせるつもりなしに書いたものであるだけに、「腹の底を語ったものと言ふことが出来る」と、その点を強調している。

- (b) 東京日日新聞社・大阪毎日新聞社共編『支那人』昭和14年9月18日

両新聞に何カ月かにわたって連載された記事に、二三の新たな論文を追加している。支那評論家村上知行、東京日日新聞社政治部長吉岡文六、東亞同文書院教授小竹文夫などの論文が並んでいる。渡辺は、これら執筆者はいずれも、真摯な支那研究家と評価している。序文に「現地の土と人に、深いつながりを持った人々であり、支那人の体臭を思いながら、しかも深く掘りさげた『支那人』が浮き彫りにされたわけだ」とある。

これらは、一般（に近い）の中国人の見た日本人、日本人の見た中国人についての印象であるとしている。(a)(b)に加えて以下の書物からも採っている。

- (c) 『時の論叢書』昭和14年9月2日 教文館 のうち

田川大吉郎 「支那の新勢」

高島平三郎 「支那の民族性」

特に、高島の論文に役立つことを多く発見し、そのなかで挙げられた12の特性（尊大性・鈍重性・享楽性・社交性・貯蓄性・尚古性・利己性・社会性・残忍性・雷同性）を比較検討上、なるべく上掲の諸項目と関係づけるように努めた、といっている。

高島平三郎は、東洋大学、立正大学などの教授を歴任した心理学者で、「満洲」に赴いた経験もある。

なお、※ 支那人の見た支那人（林語堂著、新居格訳『我国土・我國民』など）および

※ 日本人の見た日本人（芳賀矢一著『国民性十論』など）

さらに※ 第三民族の見た日・支両民族の性格（支那人の分は大谷孝太郎著『現代支那人の精神構造』など）

を取り上げる必要があるとしながらも、ここではあまり問題としないでおこう、としている。それでもなお、林氏が穏健・簡素・自然愛・忍耐・無関心・老獺・多産・勤勉・儉約・家庭愛・平和性・知足・諧謔・保守性・耽肉慾を挙げ、芳賀氏が忠君愛国・崇祖先重家名・愛草木喜自然・楽天洒落・淡泊瀟灑・織麗織巧・清浄潔白・礼節作法・温和寛恕を挙げていることだけをここに掲げて他日の研究に備えたと述べている。

結局上記(a)の資料を「日本人」、(b)と(c)の資料を「支那人」と呼んで、これをここでの研究の資料と定めている。

これらから、両群の資料を比較して、かれは、「日本人は支那人をあまり悪く見過ぎてはいらないか、支那人は日本人をあまりよく見過ぎてはいらないかという疑問が起こってくる」と危惧を表明するが、「おそらく、日本人は他民族を悪く見、支那人は他民族をよく



見るといふ相違があるわけではあるまい」とその疑念を払っている。

このようないくつもの割り切り方がこの研究の性格をはからずも表している。

## (2) 民族性格比較のために用いた標徴

民族性は自然的生活および文化的生活の上に現れてくる、と考えている。生物的とは、肉体にかかわる側面のことである。したがって、男性と異なる肉体をもつ「女性」も生物学的の範疇にいれられている。

精神的生活は、風習・習慣・意志の3方面があるとし、それは、精神的な風習は種族または民族ないし国民の生活方式が学習によって、継承されていく方面であるから、いわゆる種族性・民族性・国民性などといわれるものは、精神的な風習の方面に現れてくるものという判断を示している。このような風習や習慣を基礎として、新たな生活様式を展開していくところ、つまり個人の意志活動にも、民族性が現れてくることになる。

そこで民族性の比較は㉔生理、㉕本能、㉖試行、㉗風習、㉘習慣、㉙意志というような、生命的な、また精神的な生活すなわち自然的生活方面に加えて、文化的生活すなわち経済・政治・教化の上に現れてくるものとして見る。殊に経済は㉚生産、㉛分配、㉜法政と㉝軍政が考えられる。更に教化の方面として㉞宗教、㉟芸術、㊱学問、㊲道徳を挙げている。

(1)で挙げた資料中にみられる性格特性の記述をとりだし、(2)で挙げた15の標徴に従ってそれらを分類・整理して、両民族性格を比較していくという方法がとられた。

## (3) 結果と説明

結果部分について、概観しやすいように、表1にまとめておく。

両民族性格の自然的方面としての生物的生活を比較して、「支那」人は生存力が旺盛で、生殖力が強く、子孫の繁栄を図るとともに、自分の自己保存は他人に譲らない。日本人は男女ともに体格の発達が良く、健康で、頭脳は健全である。支那人に比較して、体軀は短小であるが、精悍の気に満ちているとしている。

両民族の女性の比較がとりあげられているのは、かなり唐突な感じをうける。この当時、「支那」人、日本人といえば男を指すもので、ここでとりあげているそれぞれの民族性には女はいっていないからこそ、女を別のものとしてとりあげたのであろう。しかも家庭的（これも何をさすか説明はない）かどうか、夫婦間の力関係における妻の支配力、良妻賢母か、苦勞を厭わないことから、愛嬌に富んでいるや氣立てのやさしさなどまで、「生物的」という範疇で、説明される。

精神的生活では、特に保存的方面である、社会的遺伝による風習、その個人的順応方法である習慣、それらは対人感情と対物感情に現れるとして、その「支那」人と日本人における比較をしている。対人感情は自尊心、社交心、人の待遇に伴う感情の3つとりあげて比較している。いろいろ特性が挙げられているが、「要するに初めの二方面については大した違いはない。ただ器量が日本人は支那人より小さいといふのである。人の取り扱いからいふと、これを補って余りあるほど、日本人は深切で、支那人のやうに残忍なことはあまりしないやうであるということに落ち着くやうに思はれる」とのべている。

対物感情はいわば趣味である。「支那」人の享樂性は強烈で「吃・賭・嫖・戯」の4つ

表1 「支那」と日本の民族性の比較

				支 那 総頻数227 (%)	日 本 総頻数171 (%)
自 然 生 活	生 物 的	生 理 能		生存力旺盛 生殖力強	体格優良 短躯精悍
		女 性		(4)	(6)
	精 神 性	感 情	対 人	尊大性 (4) 社交性 (3) 残忍性 (3)	矜持性 (5) 狭量性 (6) 深切性 (3)
			対 物	享楽性 (6) 尚古性 (3)	淡白性 唯美性
					(9)
		意 的 活 動		大度性 (5) 沈着性 (6) 忍従性 (4) 保守性 (2)	真摯性 (6) 果敢性 (6) 刻苦性 (7) 向上性 (9)
	文 化 生 活	経 済		利己性 (4) 貯蓄性 (4)	現実性 (3) 質素性 (7)
		政 治		同化性 (3) 権謀性 (5) 面従性 (7) 非組織性 (6) 宣伝性 (2) 雷同性 (4)	国家性 (3) 公明性 (9)
				現世教 (4) 拝 天 (3) 崇 祖 (4)	(神社仏閣参拝) (1)
		教 化	宗 教		楽天的 簡素的
			芸 術		(9)
			学 問	非科学的 (3)	(科学的)
		道 徳		世俗道徳 (1) (孝、五倫、五常)	(現世的) (1) (忠君・愛国)

渡邊徹 文献18) p.274より

に要約することができるという。古例・伝統を尊重する尚古性も強く、「保守的で固陋」になり、「非文化的であることを免れない」と評している。それと対蹠的に、日本人は唯美主義として、「優美・雅致・流麗・明亮を愛し、洒脱で、派手を好まず、かへって古い粗末なものをよろこび、枯淡・平直・淡白を愛好する」と評価している。

以上のような種族・個人に共通な性質を保存する方向に働く精神活動だけでなく、新局面を開拓するような活動を意的活動として、それを4つの段階に分けてとりあげる。しかし、この段階わけの基準についての言及がなく、わかりにくい。たとえば、「支那」人について、第1段階は意志遂行の態度は度量があり、太っ腹で、気持ちが大きく開け放しであるといい、さらに、自然のままに、ゆっくり、のっそり仕事をし、是々非々をハッキリいわないので、腹の底が知れないという。それが第二段階では、気が長くて、消極的で、いやな刺激や苦しみに対して無表情・無反応、無知・鈍感で無気力となってしまう。それを遅鈍とか沈着ということばで概括する。相互に矛盾すると考えられるような特性も並

び、それらのあいだの説明がなされていない。そういう態度をうみだす現生活状況にふれることはない。したがって、先入観で断じているように受け取れる記述がみられる。「支那人は大度で、遅鈍で、忍従性を持ち、保守的であるのに對して、日本人は進取で、果敢で、刻苦性を持ち、模倣にも長じてゐるが、獨創力も相當發揮することが出来る向上性に富んでいる所に、相違點がある」と要約している。そこには、かなり著者の価値観がはいりこんでいるように思われる。

風習の基本的な精神的基礎をもつ文化の一面として、經濟生活を考へている。「支那」人は徹底的に自利を図り、貯蓄のためには勤勉で、節儉を重んじるが、金銭ひとつで悪事も行われ、強い國家意識を持たないから、官吏の中間搾取を辞さないと評している。それに対し、日本人は現實主義的という点では支那人と変わらないが、相當質素儉約で、奢侈でないとし、質素儉約は天性の趣味からきていると評している。

政治面における比較では、「要するに、支那人は政治的に見て、よほど注意すべき性質を持っている。殊にその同化力の強い点については、われわれはよほど警戒の必要がある。…いま政治生活を中心として、兩民族の性格の相違の研究をして置くことが心理学徒の当面の急務であると考えられる。…仮に百歩譲って、支那に國家を認めるにしても、支那の國家は革命を認めるところの歴史を持った國家であり、わが國家は萬世一系の天皇を戴くところの國家であるということに、兩民族根本的な相違が原因している」と述べながらも、「しかし日本人の支那排斥の方法は秘密的で、ごくあくどく、陰險に行われている」との指摘も忘れてはいない。渡辺のこの研究にたいする態度がよく表現されている。

教化においては、使用した資料のなかに、「支那」人については、宗教と學問と道徳について意見が多く見出せたのに対して、日本人についてはこの3つについて述べているものがあまり拾いだせなかった。しかし、芸術については多方面にわたって、日本民族の特色を描き出そうしているのが見えたという。「支那」人の宗教については、天命を信じて、天命にしたがって、あきらめるということにあるようだ、とする。學問については、大學教育ではことごとく歐米を模倣し、孔子をも軽んじるようになって、文學を愛好し、ついに非科學的であるということをも免れない、という。科學という語をどういう意味でつかっているか判然としない。

まず、とりあげた研究が対象とした人たちの属性についての検討がなされていない点が問題となるであろう。したがって、そこででてきたものが、ある片寄りをもった対象者の主観であるのか、「支那」人および日本人一般の客観的な性格特性であるのか、検討を加えていないことによって、あたかもそれらが客観的なものであるかのように記述されている。さらに、特性項目の分類およびその基準の説明が、充分なされていない感が強く、納得しにくい。自然生活と文化生活との關係性、自然生活の生物的生活と精神生活との違いと關係性など、それらの分類の仕方が判然としないところがある。またたとえば、生物の方面の説明に、「支那人は衛生思想が発達していない。それにもかかわらず、支那人はよく生存を続けているのである」とし、「日本人は衛生に注意して、よく入浴する。清潔好き、綺麗好き」とコメントされる。このような生活習慣が、生物のものとされ、また家庭的かどうかは女性の生物的な分類にいれられる。かなり恣意的な、無理な解釈がなされてい

るように思われる。

## 〈2〉「支那民族性格の自観と他観との比較」<sup>19)</sup>

先の〈1〉の継続研究であり、題目を厳密にいいなおすと「自観の一資料と他観の一資料とによる支那民族性格の意的活動の方面における比較」ということである。その序に相当する部分で、「心理学の應用範圍を東亜の政治や軍事にまで推し広げるということについて従来以上に考えて見て頂きたい」と述べている。渡辺徹の研究にとりくむ姿勢が現れている<sup>20)</sup>。

### (1) 使われた資料

- (a) 自観の資料としては本論文のⅠの2でとりあげた林語堂『我國土・我國民』である。

林語堂は民族各員の意的活動の習得的素質を指して民族性格と云っているようであるが、さらに教育的効果を考慮し、民族性格改善の対策ということが応用心理学の問題になると指摘している。

- (b) 他観の資料として本論文Ⅰの3でとりあげた大谷孝太郎『現代支那人精神構造の研究』中に引用されているドイツのリヒトホーフエンの「現代支那人の性格観」<sup>21)</sup>である。

### (2) それぞれが挙げている支那民族性格の特徴をぬきだすと以下のようなになる。

林語堂：

- ㉑ 穩健, ㉒ 簡素, ㉓ 自然を愛すること, ㉔ 忍耐, ㉕ 無関心, ㉖ 老獐, ㉗ 多産, ㉘ 勤勉,
- ㉙ 儉約, ㉚ 家庭を愛する, ㉛ 平和主義, ㉜ 足るを知ること, ㉝ 諧謔, ㉞ 保守主義,
- ㉟ 肉欲に耽ること。

リヒトホーフエン：

- (a) 生物的なもの：強靱な筋肉をもっている。繁殖力は世界の範となる。

- (b) 精神的なもの：

- ㉑ 對人的感情；自負心が強く、ある場合には殘忍な行もしかねないが、一面には虚禮と思はれるぐらゐに禮儀を重んじ、素直で、無邪気で、秩序に對して従順である。

反面、老獐であるとか狡猾であるとか云はざるを得ないやうな點もみえる。

- ㉒ 對物的感情；無関心で、一見、寡欲、足るを知るもののやうに思はれる點もあるが、それも環境の影響がしからしめてゐるものであって、全體としては物質主義的で、日常、賭博、煙草、鴉片などに耽つてゐるものが多いことなどもこれを示してあまりがある。

- ㉓ 意的活動；相當の節制をすることが出来るので、物事に確實で、几帳面な方面もないではない。一方強靱な根氣と無比な忍耐・辛抱強さを持つてゐて、勞働を愛好してゐる。それにもかかはらず無力・柔軟で、臆病で、完成のために努力しないやうに見えるものも少なくない。全體としては保守的で、古來の慣習、傳統を尊重し、遵奉し、なにごとく模倣以上に出ない。

- (c) 文化的なもの：

- ㉔ 經濟的方面；利欲の念が強く、商才と商売欲とが属性となっている。貨幣が最高の興味になっている。

- ⑥ 政治的方面；民度は概して低く，群衆の付和雷同性も著しい。
- ⑦ 教化の方面；
  - ※ 迷信が強く，神の存在を信じないものが多い。
  - ※ 学問の方面では，好奇心はあるが，知識欲はあまりなく，機械的才能をもって  
いるだけで，実用的悟性がかかなり発達している。
  - ※ 道徳は概して家庭的道徳であって，親に対する畏敬心が強く，子どもの教育も  
尊重されている。

### (3) 自観と他観の比較

両者とも，忍耐，無關心，老獪，多産，勤勉，家庭愛，足るを知る，保守主義などの事項は共通に挙げられている特性であるとしている。「リヒトホーフエンが節制，確実，几帳面，または虚礼，素直，無邪気，秩序への従順などを挙げているのは林語堂の温順，あるいは人格の円熟とっている方面と見たものといってよからう」という。また，外国人であればこそ，自負心が強すぎるとか，残忍であるとかいうことも掲げ，拝金的傾向なども並べている，とその違いに言及している。

しかし，いずれにしても，どのような実際の行為について，どう見たのかという記述が欠けていることから，資料の説明にしても，これらのまとめなり見解にしても説明の根拠がわかりにくく，かなりの部分筆者の構えや先入観で断じているところがあるという印象を禁じ得ない。こういった特性記述研究の難点をどう克服するのが課題であろう。

## 6. 天野利武の満蒙諸民族の研究

渡辺徹の研究は，他者の記述資料を使っているにしてもかなり恣意性が強い性格をもっていた。同時期，渡辺と同様な方法で，対象文献を広げて，天野利武が満蒙諸民族の民族性の研究をしている。天野は京城大学にいたことから実地に調査研究も試みており，その経験もあってか，研究方法についての省察に特に注目したい。

天野利武は，1927（昭和2）年東京帝国大学文学部心理学科を卒業して，すぐに京城帝国大学の法文学部に赴任し，以後敗戦まで勤務して教育心理学を中心に講じた。その地理的条件が幸いして，東亜諸民族の民族性の研究に関心を持ち，「満洲」に3回，北支と内蒙古（ゴビ砂漠地帯に及ぶ）に2回出張して，現地調査を行い，研究論文9篇を発表したという。残念ながらそれらは敗戦時に焼却されて詳細には残っていない。

しかしそのなかで，1929（昭和4）年日本心理学会第二回大会で，「表情の民族的差異に就いて」<sup>22)</sup>，が報告されている。さらに，1937（昭和12）年に「満蒙諸民族の民族性の研究（第一報告）」<sup>23)</sup>，1940（昭和15）年に「支那民族性論」<sup>24)</sup>，1943（昭和18）年心理学講座の第5巻『民族心理學』のなかで「東亞民族の性格」<sup>25)</sup>としてまとめられているものに彼の主調となる研究を見ることができる。これらの研究のうち1943年に出された三番目の論文は1940年のものとほぼ同じであり，最初の労作が以後の著作のベースになっている。ここでは，第一と第二の論文について考察したい。

1934（昭和9）年春，天野は京城帝国大学満蒙文化研究会の命を受けて，1か月足らずであったが，満蒙各地を視察し，研究の具体的方法を立てるために種々調査を行い，研究

資料の蒐集をしている。

上記1934年の「滿蒙諸民族の民族性の研究（第一報告）」は主として第一篇で研究方法について述べ、それに第二篇として漢民族の民族性についての調査結果の一部を加えている。1940年の「支那民族性論」の論文は調査結果が中心のものとなっている。ここでは、まず、第一の論文で方法論について、具体的調査については第二の論文にそって、みていくことにする。

#### (1) 方法について

天野は、民族性がどのような方法で研究されなければならないかということを考えるために、まず研究対象である「民族性」の概念を明らかにしなければならない、として、民族と人種、民族と国民などの概念を整理し、民族の概念を求めている。民族を、人種・言語・地理的環境の諸条件に規定されて共通化された同一の特殊文化内容を共有する文化共同体であると同時に、相当長期にわたり同一の歴史を共有してきた歴史共同体である、としている。そういった社会的個性として民族性をとらえ、まず、その性格の規定条件としての環境を自然的環境と社会的環境との二方面から考察できるとする。

研究法の第一は、民族に共通な特有の遺伝関係に依る先天的規定の研究であり、また民族の自然的環境や社会的環境(文化史的方法)を明らかにする後天的規定の研究がある。これらは発生的研究の方法である。第二に個人や集団の行動、およびその結果としての精神的所産を観察し、そこに民族的な社会的個性として表現されているものを通して性格としての民族性の構造を研究する方法がある。民族性の表現の研究である。精神的所産を便宜上4つに分類している。第1類には、風俗・道徳・宗教・法律・社会制度等がはいる。第2類には、美術・音楽・文学等の芸術的作品や種々の著作類や科学等がはいる。第3類に属するのは、市街・住居・家具・調度・衣服・玩具等である。第4類には、主として児童の精神的所産を観察するものである。それは一定の場所、一定の時間において、一定の課題のもとに作られた作文・絵画・手工品等について観察するものである。これは、条件をコントロールすることができ、他の民族のそれとの比較研究や統計的処理が可能になる。

天野は、上記の二つの研究方法が、民族性の研究方法の根幹をなすものであるとしているが、それだけでは充分ではなく、それを補うものとして第三の研究方法を位置づけている。それは、内観法である。民族性によって規定されているような精神活動すべてが、行動や精神的所産に表現され、それが観察者によって把握されうるとは限らない。このような場合、対象の民族成員の内観報告に基づいて研究するほかない。以上の方法のなかで挙げた行動の観察や内観等はいわば自然的観察で、一回的なものである。同条件下の他者についての観察との比較もできないし、観察者の特殊な主観的態度によって観察結果が左右される恐れもある。そういった欠点を補足するために、第四の心理学的実験的方法が考えられる。実験的観察である。それには、質問紙調査法や知能検査・情意素質検査等の検査法など、探査法および、行動の実験的観察が含まれる。

#### (2) 「支那」民族の民族性

従来の観察に依って得られた漢民族の民族性特徴を総括しようとしたものである。ここ

では文献23)と文献24)から考察する。もともと同一研究に基づいたものであって、23)の続きが24)とみることができる。

直接間接に参考にした60余種の漢民族に関係ある文献、ならびに満洲各地で面接した漢民族系満洲国人および、彼の地に長年在住している在留邦人の供述等に基づく漢民族の民族性格に関する記述特徴をとりだした。同種のことを表現しているとみなせると天野が判断したものを同項目として、その頻度を数え上げていくという方法で整理した。その数は400以上にのぼったが、そのなかから、風俗習慣に関するものを除外し、代表的なものと考えられるものだけをとりだして、133項目にした。参照した文献に挙げられた頻度は多いもので31、少ないもので2となっている。ここでは、便宜的に頻度13以上の項目を挙げてみると表2のようになる。

表2 従来の文献中に挙げられた「支那」民族性の特徴

項目番号	民族性の特徴	頻度
(1)	打算的・実利的・功利主義	20
(2)	利己的・利己主義・貪欲	30
(4)	質素・儉約・廃棄物利用に巧妙	17
(13)	勤勉	17
(18)	無感動・無神経	18
(21)	残忍	17
(22)	遅鈍・緩慢・不活発	16
(31)	享楽主義・物的快楽に耽溺する	14
(37)	柔弱・臆病	24
(38)	文弱・尚文卑武	23
(39)	平和を愛する	17
(45)	嘘をつく・常習犯的虚言者・不正直	14
(46)	詐欺陰謀を好む	14
(47)	猜疑心強し	21
(49)	卑屈	13
(54)	対面を尊重する	21
(62)	同郷同族の觀念強し・地縁血族による結合力強し	13
(65)	個人主義・自立性・保身第一主義	14
(77)	礼儀を重んじる・礼儀正しい・過度に丁重・虚礼	16
(80)	保守的・保守主義	31

これらの項目と頻度についての記述は文献23)、24)、25)に共通に載せられているが、文献23)には、それぞれの項目にいった具体的記述の事例とそのような項目表現にまとめた意味やそれにまつわる解説等が65ページにわたってつけられている。24)、25)にはそれはないが、それらを考察しながら、中国人の性格の基礎的構造を求めようとする。そして、天野は「支那」民族が粘液質的な基礎的性格構造をもっていると結論しているのである。「粘液質的性格と一致する方面に関する限りに於て支那民族性の諸特徴を統一的連関的に説明することが出来るのである」として、その粘液質的性格構造と上にあげられた諸特徴との関係性について論じている。

吉川哲太郎<sup>26)</sup>は、「支那」人の民族的特異性を考えるうえで、天野のこの研究結果を心理学的、総合的な研究として評価している。

### (3) 従来の観察の主な欠点

或る特徴についての観察が民族性の観察として方法上妥当であったかどうかについての天野の検討は一顧に値するものがある。個々の特徴についてではなく、従来の観察の主な欠点を一括して、諸特徴を整理する基準として観察範囲の偏り、および観察における立場や態度の偏りに分けて考察している。前者は観察対象に取り上げた人たちがその集団の代表とはいえない場合であり、後者は、観察者自身もっている先入観や偏見などに関わっている。

#### ① 観察範囲の偏倚

一般的傾向としては、民族の8割を占める農民を対象とする観察が比較的乏しい。

##### (a) 被観察者の所属範囲の多くは、

- ① 雇傭関係   たとえばボーイ・労働者
- ② 商業取引・政治外交上の折衝など社会団体の利害を中心とする関係
- ③ 交友関係   多くの場合観察者が知識階級に属する関係上、被観察者が官吏・軍人・学者・中以上の商工業者等の知識階級
- ④ 教育関係   多くは学校生徒
- ⑤ 宗教上の教化伝道の関係   比較的広く各階級・各職業の者。欧米牧師が多い。
- ⑥ 偶然の関係   旅行の際などに偶然遭遇した個人や集団、などに限定されている。学生運動とか種々の社会団体の活動とか、その他政治・外交上における個人や党閥の行動等を、新聞雑誌等を通じて間接的に観察する場合もある。

##### (b) 精神所産の観察

178ページに挙げた4分類にわたって観察されることがのぞまれるが、普通は2類、3類の一部、即ち美術・文学等の芸術作品・種々の建造物・住居・衣服・銃器等に限されていた

#### ② 観察における立場及び態度の偏倚

##### (a) 立場の偏倚

宣教師は教化伝道の立場から、教師は教育の立場から、商人は利害の立場から等、観察しており、それに気づいていない。

##### (b) 態度の偏倚

民族に対する観察者の感情的態度、即ち好意的態度ないし嫌厭的態度がみられる。

##### (c) 発生的考察に於ける観察の偏倚

観察結果の解釈・説明に於ける誤り、つまり観察者独自の観点からの解釈や説明を固執するあまり、認知できない特徴を実際にあるように観察したり、観察結果を自分の都合のよいように歪曲したり、自分の解釈に合致する特徴のみに眼をむけるという場合もあり、あるいは一、二のものを採って他をかえりみずそれだけで民族性の一切を説明しようとする、などがみられる。

このような反省的批判をしていながら、実際の彼自身の文献研究について、個々の特性



検討の努力にもかかわらず、その具体的反省や注意が伝わってこないのが残念である。この種の文献研究のなかでは総合的なものといっているだろう。しかし、ひとたび具体的研究結果として提示されると、吉川の論文にもみられるように、その特性叙述が一人歩きし始める。重い政治的状況のなかでの中国人対象の研究だけに、天野の責任とだけはいえないが、その辺の心配りはそれぞれの生きる姿勢とかかわって、難しい期待といえるのだろうか。

## 7. おわりに

東京帝国大学心理学出身で満鉄大連図書館長をしていた柿沼介は、『支那民族性』とは、『支那』といふ土地に代々住み続けて来た民族が、その歴史、風土、経済に規定され、或ひは外国からの諸影響をうけ乍ら、考へ、生活して行く中に、漸次形成されて来た『氣質』である<sup>27)</sup>と書いている。そこで、民族性を氣質として捉えているところがいかにも心理学者らしいのであるが、「その『氣質』を研究するには、その基礎をなす支那の風土と歴史の把握及社會經濟の分析を必要とする」と述べている。そこに図書館人らしい視野の広がりが見える。

植民地支配および侵略先の民衆心理ないしその性格把握は、心理学者たちにたいする社会的要請でもあった。この点を重く感じていたのが、渡辺徹であったと思われる。しかし、「科学的」な把握でなければならない。そこで、当時の社会では心理学にかぎらず、多くの研究や論説が発表され、またそれに刺激されたり、それらを対象とする研究等が生み出された。ここでは、心理学的研究に影響を及ぼした、外国人（一つは当の中国人によるもの、もう一つはドイツ人心理学者によるもの）を概観し、それらを含む文献による中国人の人格研究を検討した。しかしそれらは天野のいう「観察者の立場や態度の偏り」を受け、「観察範囲の偏り」もみうけられるのに、その検討・反省は薄い。

生物学的ベースに歴史・文化的影響が多重的につくりだす民族性格といった研究対象は、学際的テーマであって、ただ心理学的調査・知見だけで十分ではない。天野は、その点、研究の枠組みの妥当な提示をし、従来の研究の欠陥の指摘もこの限りでは正鵠を射ていると考えられる。しかし、実際研究は方法論的考察に追いついていない。

このような既成の文献による研究ではない、心理学的情報収集による民族性格研究が、試みられはじめたのが、「満洲」在住の心理学者の手によるものであったことも注意しておいていいだろう<sup>28)</sup>。

## 註および文献

- 1) 小谷野邦子 2006 日本における民族心理学と「支那」「満蒙」民族調査研究—1920年代まで—  
研究代表者 高砂美樹 2006 日本における教育心理学の成立と展開を巡る歴史的研究 平成15年度～平成17年度科学研究費補助金 基盤研究 (B) 研究成果報告書 課題番号15330138 pp.1—33
- 2) 桑田芳藏 1931 民族精神の發達 岩波講座 教育科學 第三冊 pp.1—39
- 3) 楠 弘閔 1934 民族の特異性に就ての實驗的把握 精神科學會編輯 精神科學 昭和9年第2卷 目黒書店 pp.67—92  
楠 弘閔 1935 民族性格に就て—主として其の自然的規定條件に就て 精神科學會編輯 精神科學 昭和10年第2卷 目黒書店 pp.143—181

- 4) 久保良英 1936 民族性研究の二三 精神科學會編輯 精神科學 昭和11年第2巻 pp.127-149
- 5) 安倍淳吉 1942 民族心理學に於ける民族の問題 東北帝國大學文學會編輯 文化 第9巻第8號 特輯「心理學」 pp.89-120
- 6) 戸川行男 1942 民族の意志 目黒書店
- 7) 田中寛一 1936 東洋諸民族ノ智能ニ關スル比較研究(第1報) 東京文理科大學 文科紀要 第12巻  
 田中寛一 1937 東洋諸民族ノ智能ニ關スル比較研究(第2報) 東京文理科大學 文科紀要 第14巻  
 田中寛一 1937 東洋諸民族ノ智能ニ關スル比較研究(第3報) 東京文理科大學 文科紀要 第15巻  
 田中寛一 1939 東洋諸民族ノ智能ニ關スル比較研究(第4報) 東京文理科大學 文科紀要 第17巻
- 8) 林 語堂 1938 我國土・我國民(新居格訳) 豐文書院  
 原著は, Lin Yutang 1935 My Country and My People; N.Y.: John Day  
 なお, 同書は以下の新訳書が出ている。  
 林語堂(鋤柄治郎訳) 1999 中国=文化と思想 講談社(学術文庫)  
 林語堂は中国漳輯(現福建省龍溪県)に1895年に生まれ1976年に香港で没している。
- 9) 笠間果雄 1937 解説 文芸 1937年11月号 改造社 pp.184
- 10) 柿沼 介 1938 刺語 満鉄大連図書館報『書香』昭和13年9月 第109號 p.8
- 11) 加納三郎 1938 觀照的理解の頂點と限界—林語堂・我國土・我國民を讀む— 満鉄大連図書館報『書香』第109號 昭和13年9月 pp.1-3  
 加納三郎は満洲を中心に論評した文明批評家である。
- 12) 大井浩一 2004 メディアは知識人をどう使ったか —戦後「論壇」の出発— 勁草書房 pp.56-65
- 13) フレーン は, 1882年に生まれ, 1907年にミュンヘン大学で心理学博士号を取得した。広く教育文化に関心をもち, イギリスにおいてモンテッソーリの教育について研鑽をつみ, ローマにわたって同博士を訪問して意見交換などをしたが, その後ロンドン日英協会で, 日本文化, 教育および芸術にかんする論文を発表する。1913年に英国よりフランス, ドイツ, イタリアを経由して, アラビア, インドおよび「支那」に赴き, 各所で西洋と東洋の心理学について講演をした。同年6月から11月にかけて来日して, 政治・外交・教育・芸術などの各分野の人物たちと知り合ったが, 年末には「支那」にわたる。以来1937年まで中国に滞在して日常的に「支那」的生活をおくり, いくつかの省等の政治・教育顧問を勤めるかたわら, 「北支」に実業教育機関を, 廣東に師範学堂を開設した。またその間, 「支那」民族の心理研究をして, 漢文や英文で多数の論文を発表している。1938(昭和13)年に再来日して, 各方面で「日支」の連携を説いてまわった。その折りに井上民族政策研究所の井上雅二と知り合い, この間のフレーンの蘊蓄を要約して本書出版の運びとなったという。
- 14) ヴィクトール・フレーン 1941 支那民族性の研究—獨逸心理學者の觀たる— 井上民族政策研究所 研究資料第一輯 刀工書院
- 15) 大谷孝太郎 1935 現代支那人精神構造の研究 東亜同文書院出版部
- 16) 大連圖書館所蔵 支那民族性關係文献抄録 1938 書香第109號 附録 p.2
- 17) 渡辺徹は1883(明治16)年9月7日に福島県に生まれ1957(昭和32)年に没した心理學者。  
 東京帝國大學文化大學哲学科心理学専修を卒業して同大学院に進み, 人格について研究をした。1914(大正3)年日本大學講師となり, 1924(大正13)年日本大學法文學部文學科心理学専攻の開設で主任教授となる。1931(昭和6)年, 淡路圓次郎や久保良英などと応用心理学会を結成し, 戦後も一貫して応用心理学会のために尽力した。1937(昭和12)年には「重度戦傷者職業指導研究会」を結成し, 肢体不自由者の研究, その他人格心理学はもとより, 心理学史など応用分野の心理学的研究と心理學者の組織化に多くの業績を残した。
- 18) 渡邊 徹 1940 日・支兩民族性格の比較検討における二, 三の資料について(上, 下) 東京文理科大學編 教育心理研究 第15巻 pp.90-105, pp.261-275
- 19) 渡邊 徹 1940 支那民族性格の自觀と他觀との比較 —特に意的活動の方面について— 東京文理科大學編 教育心理研究 第15巻 pp.803-808

- 20) 渡邊徹は、「国民精神総動員心理學者對案序説」(『教育心理研究』第10巻7号1938)を著した。「国家総動員法」が1938年4月1日に公布されたのにもない、アンケート調査を実施して、心理学者として国策にどのように協力していくべきなのかという見解を述べたものである。当論文もこの線に沿った労作のひとつである。
- 21) フェルディナント・フォン・リヒトホーフェン (Ferdinand Freiherr von Richthofen) は、1833年5月5日カールスルーエに生まれ、1905年10月6日ベルリンに没した、ドイツの地理学者・探検家であり19世紀の社会学者である。ブレスラウ大学(現ヴロツワフ)およびベルリン大学で学び、1856年学位をとってから世界各地を旅行して歩き、1872年に帰国、ベルリン地理学会会長、ボン、ライプツィヒ、ベルリンなどの大学教授として活躍した。  
「現代支那人の性格観」は、リヒトホーフェンが1868年9月から1872年10月まで中国各地を旅行した時の旅行記“China, Ergebnisse eigener Reisen”(1877—1912, 5巻本, 附・地図)から、大谷が抜き出したもの。
- 22) 天野利武 1929 表情の民族的差異に就いて 日本心理學會 心理學論文集 II 第二回大會報告 岩波書店 pp.291—294  
日本人・朝鮮人・「支那」人・米国人の児童を対象として、快・不快の感情をひきおこす味覚刺激および嗅覚刺激を与え、その際の彼等の表情を写真に撮影して比較した研究である。
- 23) 天野利武 1937 満蒙諸民族の民族性の研究(第一報告) 京城帝國大學滿蒙文化研究會報告 第三冊 京城帝國大學滿蒙文化研究会(代表者:速水滉)
- 24) 天野利武 1940 支那民族性論 京城帝國大學大陸文化研究會編 大陸文化研究 岩波書店 pp.177—205
- 25) 天野利武 1943 東亞民族の性格 —支那的性格と蒙古の性格— 松本亦太郎・桑田芳藏・淡路圓治郎監修 現代心理學 第五巻 民族の心理學 河出書房 pp.149—209
- 26) 吉川哲太郎 1941 支那社会生活の性向 —教育的角度よりの一考察— 同志社東亞研究所報告
- 27) 柿沼 介 1938 文献抄録 満鉄大連図書館報『書香』昭和13年9月 第109号 p.1
- 28) 小谷野邦子 2002 「満洲」における心理学 —前半期における人物を中心として— 茨城キリスト教大学紀要 第35号 pp.161—177  
小谷野邦子 2003 「満洲」における心理学 —建国大学とその周辺— 茨城キリスト教大学紀要 第36号 pp.163—179

### The Occurrence of “Shina” (China) and “Manmou” in Japanese Ethnopsychological Articles

This paper aims to describe and consider several Japanese articles about the ethnic characteristics and thought patterns of Chinese in the 1930's. The paper involves a review of the literature on the subject.

First, I analyzed two translations, one is by a Chinese cultural critic, Lin Yutang. The other is by a German psychologist, Victor Frene. Lin's study was generally regarded as proper. But it has been criticized for its failure to grasp the nature of Chinese resistance to Japan. Frene's argument was significant in establishing harmonious relationships between Japan and China. He called the attention of Japanese leaders to their attitudes toward Chinese traits. No critics had previously taken notice of this suggestion.

Next, I regarded three studies by Japanese psychologist: Kohtaro Ohtani, Thoru Watanabe and Toshitake Amano. I have introduced their views on the matter, examining their methodologies and outcomes. The views of Watanabe tend toward ethnocentrism. Amano had difficulty reconciling realistic research with his views of the ethnic group. In conclusion, psychological research on this theme was limited in those days.